

『小六教育技術』一九五八年六月号（小学館）

特設時間にこだわるな

今までの実践の上に築こう

へ語る人 国立教育研究所 矢口 新 氏

(写真左端)



通達が発表になって、もう一か月余が過ぎた。現場ではこの特設時間をどうしているか、着々研究と論議が続けられているだろう。本誌でも先月号で「道徳の時間をどう実践するか」を緊急特集で扱った。今月も、続けて「道徳」実施要綱を問題にし、どう考えていき、今後の計画をたてていったらいいか、矢口新氏に聞いてみた。以下は本誌記者との一問一答である。

形の上では「修身」と、どうちがうか

……結局は同じものになる恐れが

本誌 この通達の形を表面的に受けとれば、確かに「指導案」を例にとっても、いわゆる昔の修身の上から押しつけ的なこういうふうにしなればならないんだといったものとは、形の上では違って来ておりますね。そういう点ではどうですか。

矢口 それは何ていったらいいかな、学習の形式が違うということかも知れませんが。そこで違いの点で一番ピンと来るのは、戦後用いられた新しい学習の形式、ディスカッションとか発表、それがここではかなり重要視されているということ。で、そういう違いはおそらく全体を貫いて出ているでしょう。それが道徳教育についての本格的な違いなのかどうかということになると、私は問題があると思うんです。そのところがやっぱりむずかしいところじゃないですか。

本誌 たとえば、これの目標なり指導内容を見ても、子どもたちの日常生活とそれから、教科の中でやる道徳教育ですか、そういうものを一応基盤にして、一週に一時間なり、まとめて時間をとっていくという考え方は伺えますね。この中では、そういう点では、昔の修身とは、打ち出し方において、根本的な違いは確かにはつきりあるわけですね、形の上では……

矢口 だから、全体として、何か生活指導的な、生活にそくしてやるという印象は、ここで伺われますね。そこで、今言った新しいやりかたであったら、特色があつて、戦前とは違うというけれども、その違いは現実において持ち続けられるかどうか、最後にだんだん修身のほうによっていってしまうのじゃないかという気がするのです。

特設時間の限界

……何を子どもにわからせるのか

本誌 その点について、話が少し前にもどるけれど、昔の修身と今度のものとのどこが違うのかという点、例えばまったく同じに受けとつている層もあるんだという話もありますが、そういう点についても少し伺いたいのですが……。

矢口 道徳的な心情を培うというのは、どういうのかということを検討する一つの例として、私は前にある授業を見たんだ。それは社会科の授業に関係したことでこんな作文を書いている。お母さんという題なんです。その子どもはお父さんがいなくて、家も大変貧乏で、母親が日雇いをして自分を育ててくれた。そういう事情にあったから、母親と子供の関係は非常に親密で、普通の子どもとは違うのですよ。妹が一人いるわけだけでも、お母さんが遅く帰ってきて、いつもはお母さんが帰って来てから御飯を炊いて食べさせてくれる。それが非常に遅いときには自分が炊く。あるとき母親の帰って来るのが、いつもより遅いから、御飯を炊いて待っていたんですけれども、妹がおなかのすいたというので妹に食べさせた。そこへお母さんが帰って来たので、しまった、それならもう少し待ってればよかった」と、こういう作文な

んですが、それを先生が児童に読んで聞かせて、その何とかちゃんの気持ちを、子どもたちみんなに検討するのです。

そこではいるんな子どもができてきましてね、おなかのすいたから食べちゃっていいんじゃないかという子が割合多かった。そこで、そのときの先生の取り扱い方がおもしろいと思つたのは、待っていたほうがいいかなんていうことを問題にしていない。その何とかちゃんというのは、待っている気持ちがあつたか、どうなんだろうか。おなかのすいたから食べてもいいんだという気持は、この何とかちゃんは持つていなかったのだろうか。そういうふうにしてその作文をみんなに分析させたのです。

で、おなかのすいたり食べてもいいんだということは、この何とかちゃんにはわかつているんだ。また妹がおなかのすいて、かわいそうだという気持もあつたんだ。そこへお母さんが帰って来たんで、ああもう少し待っていて、いっしょに食べればよかったという気持もあつたという分析もするのです。それで何とかちゃんの気持はよくわかつたね、という、みんなよくわかつたと言っています。おなかのすいたとか何とかと、ただ言うだけでは意味がない。いい行為、美しい行為、美しい気持は、なかなか具体的場合になるとむずかしいんだということ、先生が子どもにわからせようとしているんで、それでおしまいにしているんです。

本誌 では、さらに具体的にお話頂くとすれば、どういうことになるんでしょうか。大変重要な問題だと思ふんです……。

矢口 そういう非常に具体的な場で、前の社会科や家庭科の中でやっているもの、それがみんなにぴんとはいつて来る。そういうような人間の心を分析して、なるほどと思う学習が、行なわれている。それを特設の一時間で親子の関係を、どんな形式で取り扱うにしても、いわば構えて取り扱ったときに、果たしてそういうふうになるかどうかということが問題だ。そういう意味で道徳的な心情や道徳性はいつて来るというの、実はいつも具体的な場面、目的を持つた生活をしていてその中で反省されて来る、自覚されて来るということが、道徳が身につくもつとも基本的な姿だと思ふんですよ。「これから道徳のことを問題にする時間だ」と、こういうふうな構えたら、ほんとうははいっていけないんじゃないかという気がするのです、というのは具体的な自分の姿、他人のでもいいんだけれども、反省して見る。そこに初めて心の問題は見えて来るのであつて構えたら見えなくなる。根本問題はその点で、そこで昔の修身と同じようになるおそれがある。私はつくらないほうがいいというの、少し言ひすぎるかも知れないですけども、特設時間をつくった限界というものを考えておかなければならない。こういうものが作られなければならないと

いう、日本の社会的、自然的な事情があるから、必ずしも作らないほうがいいといっているのではないですよ。私はまず道徳問題で、一番基本的なものは、ある意味においては、教え方の問題、または道徳の形式のされ方、そうしたことが根底にあるんじゃないか。そこへいったいどれだけ目をつけているかという事だ。

カギは子どもとの接し方に

……子どもの実態の中に突っ込んで

本誌 そういうふうにお話を伺いますと、昔の修身と、今度出た道徳については、かなり形式的にも内容的にも違った点が認められているが、結局背後にあるものは、昔の修身と今度のものとは一つの同じような限界が、つまり、子どもに与えた場合の限界がはつきり出て来ていると言えるわけですね。

矢口 たとえば「丈夫なからだ」とか「友だちと仲よく」なんて、よくやるでしょう。たとえば先生が、皆さん朝は早く起きましようとか、夜は早く寝ましようね、という、子どもはみんなハイと言うにきまっていますよ。そういう授業を見ていて、いつも私は思うんだけど、そこで先生は、どうして子どもの実態にまで突っ込まないかという気がするのです。ただすつとやらせてしまうのですね。

子どもに口でそうしましようねという、そう

いうやり方をしていても、やっぱりお説教していることですよ。朝は早く起きましようね、夜は早く寝ましようね、ということをや、ひとりひとりの子どもに聞いてごらんさい。朝は早く起きていませんし、夕べだつて早くなんて寝てやません、半数以上の子どもはどうしたとか何とかいっても、結局、実態はまるで違うのです。で、今の学習というのはそういうところにはいつていない。手を洗うことだつてそうですよ。じゃあ今日、昼飯食べる前に、どれだけの子どもが手を洗ったかという、洗つてないものが多い。友だちと仲よくしましようといつても、きのうはどうだったかという、大抵の子どもは、みんな一回や二回は喧嘩している。子どもの心を養うという点において、ほんとうのものを持つてないと思うんですが。私はそういうところでは、生活指導は実際は成り立つていないと思うんですよ。

その意味で、修身教育になるというおそれは、現在あるとも言えるのですよ。実際にやっているんですよ、学校の中は。

そういうことが家庭の中にはいつていくともっとひどくなると思う。おそらく私の家庭なんかでもそうだけれども、一日中朝から晩まで何十回となく子どもに命令と禁止が発せられている。朝早く起きなさい、親の言うことはよく聞くものですよ、どうどうしなさい、というふうに命令と禁止ばかり。子どもが散らかすと、

片づけないとか、文句は言うけれども、じゃあ親がこのところを片づけましようねと、いつしよになつて片づけようとするかという、それはしない。それを片づけをしないでだらしないとか、子どもを批評したり、怒つたりする、怒つたりしなくても、何かいけないとかいんだとかは言うけれども、子どもといつしよになつて、片づけましようね、ああすればいい、こうすればいいといったことはしない。日本のおとなは子どもとつき合えないという性格を根本的にもつているんじゃないかと思うんだ。それが昔の修身教育の産物だと思ふんです。あるいはもっと前からあるかも知れない封建的なもの、そういう基本的なものがあるから、それがやっぱり根になつて、こういうものが出ていると思うんですよ。私の基本的なものの考え方は、そういうことなんですよ。

人間の尊さを具体的条件の中で

……子どもに何を話し合わせるかが問題

本誌 そこで今度の指導案の「その一」「その二」をごらんになりまして、何か問題点というか、どんなふうにお感じになりましたか。まず「その一」については……

矢口 これは「その一」でも「その二」でも同じなんだけれども、えらくそらぞらしいという感じがしますね。やっぱり特設時間とい

うことがあるからだろうと思うんだけど、もし、特設時間というものを置いて、シユバイツアーという人の伝記を話す。これは話でなくても、映画でも何でもかまわないが、そういうものを見て、結局、どこが偉かったかということ、取り上げるといふことになると思うんですよ。どこが偉いということを見ることで、いったい子どもの心情を養えるものかどうか、疑問を持つわけですね。

本誌 そうしますと、もし先生だったらどんなふうには……。

矢口 だからわたしは、何でえらいことなのか、正しいことなのかを取り扱おうという、そういう例を出さない方がいいのじゃないかと言ってきた。これは委員会の人にも、私の意見として率直に言っておいたんですよ。道徳教育はもつと人間の心を理解する、そういう方向に持って行かなければならないということ、特に強調する必要があるんじゃないんですか。

本誌 特にこの展開例あたりで、非常に疑問に思われる点というのは、どういうところにありますか。

矢口 もしシユバイツアーの話をして聞かせる、つまり伝記の梗概を話して聞かせるのと、バカバカしいもので、道徳教育にも何にもならないと思う。文学とか芸術とか、そういうものに具体的に触れなければならぬと思うんですよ。そのところに問題があると思いますね。

先生がいくら話術の名手であっても、そうはいかないと思います。私はこう思うな。アフリカの土人に対して、こういう考え方を持っているという、もつと具体的な心情、具体的な人間の生活の姿を取り扱うのだという表現の仕方が、ここでたりないんじゃないかと。それよりも一つ問題は、感想を発表させるといふ、そつちのほうの問題がもつと大きい……。同席の者同士で鉛筆対談をさせるとか、二、三話させて話し合うという、こういうことは非常に内容とマッチしない、ぜんぜん切り離された形式にすぎないでしょうね。ところが実際では、ここで取り扱う感想の発表なりなんなりは、内容とマッチしていなければならぬでしょう。一体こういうような内容なら、子どもがどういふふうの話し合いをしなけれならぬのか、そのところが大事だと思っております、そのところですよ、前に作文の例を挙げたのは。

何とかちゃんは、お母さんを待っていたほうがいいのだから悪いだろうかなんてそんなことより、その何とかちゃんの心は、どういふふうになんかに乱れていたのだろうか、そういうことを問題にしるということだろうと思えますね。そういう指示の仕方が、もうちょっと出していたらということだ。だから反省するものは何だということが、もつとはつきりわかるように反省すべきだと思います。反省することが何だということ、これをみてもわからないんだ

もの。

本誌 形式的な捉え方ですね、まったく。

形式的な「夏休みの計画を立てよう」 四十五分で何ができるのか……

本誌 では指導案「その二」のほうについてはどうでしょうか。

矢口 いや、そういうふうなものだと、考えるのと、ここで一時間特設時間をとって、こういう計画を立てることが、いったい果たして効果のあるものを生み出すことができるか、どうかというのを、私はむしろ心配するのです。おそらく一週間も十日もかかって立てなければならぬ問題だろうと思うんです。ところが、これが単なる行事として一時間だけそういうことをやればいいんだというふうには、受け取られやしないか。形式的にそういうことだけがいわゆるちゃんじやないかということなんです。ほんとうに自分の生活設計をして、それをほんとうに実践して、そしてそれを終ったから、いったい自分はどれくらいやろうと思ったことがやれたか、ひと月前の自分は、何と観念的であったことよ、ということが終ってから出て来るはずですよ、ほんとうは。生活の設計はそういうものとしてあるべきでしょう。だからここにも、特設時間を設けて、夏休みの計画を立てようという授業をやるのだという印象を与える

でしょう。そこに非常に心配するところがあるんですよ。だからそういう意味で一週間もひと月もかかって、母親と子どもがいつしよになって、だんだんつくりあげてきたものじゃなきゃならん問題だと思っんですよ。

本誌 すると、児童会なり、学級での話し合いなりが、とかくおざなりになっているというところが一般的に言われているけれども、それにさらに拍車をかけるというふうな……。この点については、今後、現場でも十分に考えていく必要がありますね。

要は今までの実践の反省の上から

……特設時間にとらわれるな

本誌 時間がかかり経ちましたので、最後に……。結局こういうふうな通達を何らかの形で、現場では具体的な一つの姿にかえていかなければならないと思うんです。そういう点について、特に現場での配慮しなければならぬ点が、今まで出たわけです。今までの実践というものの上に、さらに発展的にこういう通達を受けとめていくには、どういうふうな心構えで進んで行ったらいいか、何か具体的に矢口先生はこう行きたいというふうな……。 (笑) そういう点をお話していただきたいのですが……。

矢口 たとえば国語なら国語で、この徳目に照し合わせて、そういうものが含まれている教材

があるが、それを過去において取り扱ったときに、徳目の見地から照し合わせて取り扱っていったかどうか、そうした点をいつぱん押さえて見る。そうすると、今ここにでている徳目のうち、そういう見地ならこういう位置づけということ、社会科でも、理科でもできると思う。教科としての立場からはそういうことが、まず一つあるんじゃないかと思えますね。

それから生活指導とか、特別教育活動とか言われている面、それからもうちょっと言えばグラウンドで児童が遊んでいるときのいろいろな感情やなんかを見ると、ここにあがっている徳目の面から、そこへ出ていって先生が指導しなければならぬということ、みなければならぬのです。そういうものをやっていたかどうか、チェックするような仕事、指導要領が出るまでに、じっくり検討して並べて見る。そうしたら二学期からちゃんとできるようなものと思うんですけどね。今までやっていたものを、もうちょっと強化すればよろしいというのが、たくさんでてくると思うんです。特設時間というのに捉われたら、一番簡単なのは、三十五時間に三十六を割り当てるわけでしょう。それをやったら、どういうふうをしようかと本物にはならないですよ。ただここにあがっているような感想を発表させるとか、計画を立てさせるということになっちゃうんですね。だから特設時間に捉われないことができるか、で

きないかというのが問題だと思います。

本誌 結局現場のいままでの受け取り方をみていていえることは、いままで生活指導をやっていた先生は、この徳目の時間がはっきりしたために、ますますどういふふうにやっていたいかわからなくなったということは、いえると思います。それと同時に、いままで何にもやってこなかった先生方には、非常にきっぱりと割り切ってやっていけるという現象が現場に出ているのですね。

矢口 それにまたぜんぜんやってない先生といったところで、ただそれは自覚してないだけで、さっき言ったように、手を洗いましょうとか何とか、やっぱり何かの形でやっているんです。だから、またそれをだれか冷静に見ている人があってどれだけのことをやっているかともし調べると、案外「道徳」の実施要綱ぐらいのこととはやっているかもしれないし、もっと効果のあるものもやっているかもしれない。だから、何とかしていままでやってきたものを土台にするということ、私は守ってほしいという気がしますね。

(文責・編集部)